

江戸川大学・江戸川短期大学

学 報

授業実施についての教員による
自己評価結果報告書

平成 15 年 2 月

江戸川大学
自己点検委員会

目 次

1 . 平成 1 4 年度前期授業評価の目的と手段	3
2 . 結果の概要	3
2 . 1 単純集計結果	3
2 . 2 回答間の関連についての考察	4
2 . 2 . 1 再カテゴリ化項目とそれらの間の関連	4
2 . 2 . 2 授業形態別にみた授業のあり方	5
2 . 2 . 3 2 群の平均値の差の検定による特徴把握	6
2 . 2 . 4 数値項目の上下端にみられる特徴	7
3 . 考察	8

1. 平成14年度前期授業評価の目的と手順

この報告書は江戸川大学における自己点検評価活動の一環として、平成14年度前期授業科目の教員による評価を試みた結果を紹介するものである。この種の試みは初回のためデータとしての安定性を問うことはできないが、現状評価の一つの方法として検討に値するものと考えられるため実施した。

江戸川大学で平成14年度前期に実施され学生に対する成績評価をくだった科目(コマ)数は231コマであった。このうち54.7%にあたる159コマは専任教員によって実施された。教員による授業評価はこれらのコマを対象として行われた。今回は客員教授、特任教授、非常勤講師によって実施された72コマは対象としていない。

担当教員への評価実施依頼は平成14年度前期終了直後の10月初旬に行われた。締切時の10月末の回収率は約60%と低かった、このため未提出の教員に対して再度提出を依頼し、提出期限を11月末まで延長した。この結果113科目/コマに対する評価票が回収された。これらは専任教員の担当コマ数の71%にあたる。ただし時間割構成上、科目とコマを厳密に分けられないため、コマを合算して報告された科目もある。また「前期に実施し成績評価をくだった」コマを対象としたのだが、通年科目など実施中のコマに対する評価票が若干数提出された。これら対象外の回答は除外し分析データには含めていない。提出状況を教員数ベースでみると提出率は85.9%であり、専任教員のうち9名からは提出されなかった。

2. 結果の概要

2.1 単純集計結果

評価票のうち数値項目に対する単純集計結果を付録Aとして巻末に添付した。

回答者属性では教員の性比が男7対女3であること、年代構成で50歳代以上が約7割を占めている点が特徴である。

科目の属性では1~2群科目が殆どであり、授業形態では3分の2が講義である。このほか語学、演習・実習、情報の半期科目が対象となった。これら以外の通年科目の評価は後期終了時に実施されることとなる。

必修・選択別では7割が選択科目であり、必修/選択必修は合わせて24%である。

受講者に学科指定のある科目は4割あり、指定学年は1年次生48%、2年31%、3年21%と、評価対象となった科目の半数は1年次生に対する科目であった。

受講登録者数は5~450人、平均79.9人、標準偏差72.9人となっている。

また教員が単独で担当する科目が殆どで96.4%を占める。

試験を除く前期の授業実施回数は11~14回で平均13.3回である。

これらの科目に対する平均的な出席率(概算)は70%以下が53.2%、70~80%が23.9%、80%を超えるものが22.9%である。毎回出席をとった科目は84.1%である。出席チェックの方法としては「名簿読み上げ」37.1%、「授業内レポート提出」31.0%、「カードレコーダー使用」25.7%などが多いが複数の方法を併用している場合もある(件数計116.9%)。

授業のスタイルを自由記述で尋ねた結果は付録Bとして添付した。

教材などで利用したものとしては「プリント配布」73.5%、「板書」72.6%、「スライド・ビデオなど」53.1%、「OHP・OHC」46.7%、「テキストを指定」46.0%、「パソコン利用」44.2%などが多く、複数の教材を利用していることが分かる。(件数計349.6%)

学生の達成度、成績評価のために利用したものとしては「出席回数」76.1%、「定期試験」61.1%、「授業内レポート」48.7%、「レポート提出」45.1%、「受講態度」35.4%などが多く、ここでも複数のデータを利用している(件数計300.9%)

学生とのコミュニケーションに利用したものとしては「質疑応答」66.4%、「対話」47.8%、「授業内レポート」41.6%となっている(件数計173.5%)

今期の授業運営についての5段階評価による15項目で合意率(あてはまる+ややあてはまるの比率)が高いのは「授業内容は学生にとって役立つ」86.6%、「予定した授業内容をこなせた」78.8%、「この授業を行うのは楽しかった」75.0%、「シラバスに合致した授業ができた」72.3%などであり、低いのは「学生の私語が多かった」23.4%、「多量の板書が必要だった」25.2%、「学生の遅刻が多かった」26.2%などであった。

今期の授業のあり方を100点満点で採点すると50~95点、平均75.1点、標準偏差10.6点であった。

担当授業についての独自の工夫、問題点・要改善点、希望するサポート等について自由記述での回答をもとめた結果については付録Cとして添付した。

2.2 回答間の関連についての考察

この調査の回答数は113票と少数のため、回答間の関連を見るためのクロス集計の有効性は限られている。そこで以下の方法により特徴を探ることとした。

- ・いくつかの基本属性項目等のカテゴリを合併して2群とし、合併後のカテゴリ間の関係をクロス集計で確認(2.2.1)
- ・授業形態を「講義」「その他」に分けた場合の、出席チェック、利用教材、達成度評価学生とのコミュニケーションについてのクロス集計を行う(2.2.2)
- ・またそれらの2群に便宜的に「2群の平均値の差の検定」を適用し回答の特徴を把握する(2.2.3)
- ・数値項目として得られたデータについて、上下端データを個別に列挙して特徴をみる(2.2.4)

2.2.1 再カテゴリ化項目とそれらの間の関連

まず再カテゴリ化の対象となった項目とそれらの間の有意性を確認したところ表1のような関係が見られた。

表1 再カテゴリ化された項目とそれらの間の関連

項目	再カテゴリ後の定義		有意な関連のある他の再カテゴリ項目	
	群1	群2		
群	1群	その他	出席率	登録者数
授業形態	講義	その他	出席率	登録者数
学年指定	1年	その他	出席率	登録者数
出席率	~70%	それ以上		
登録者数	~69人	それ以上	出席率	
自己評価点	~79点	それ以上		

* 再カテゴリ化の基準は各群への回答数ができるだけ折半される点で分割した。

** 関連の目安は相互クロス表のカイ2乗値に対するp値<0.05である。

ここでの特徴を確認すると、

- ・1群科目の出席率がよい
- ・講義以外の科目の出席率がよい
- ・学年指定が1年の科目の出席率がよい
- ・1群科目の登録者数は少ない
- ・講義科目の登録者数が多い
- ・登録者数の多い科目の出席率はよくない

などであり、いずれも経験的に首肯できるものである。自己評価点はこれらいずれの再カテゴリとも関連が見られない。

2.2.2 授業形態別にみた授業のあり方

このほかクロス集計の対象として意味があるのは授業形態別にみた「出席チェックの方法」「利用教材」「達成度評価に利用したもの」「学生とのコミュニケーションに利用したもの」などであり、それらの結果を表2.1～2.4とてし示す。

表2.1 出席チェックの方法・授業形態別(複数回答)

カテゴリ	全体	授業形態別	
		講義	その他
総数	113	75	38
名簿読み上げ	37.1	20.0	71.1
授業内レポートの提出	31.0	36.0	21.1
出席簿回覧	2.7	4.0	-
カードレコーダー	25.7	37.3	2.6
その他	20.4	22.7	15.8

表2.2 利用教材・授業形態別(複数回答)

カテゴリ	全体	授業形態別	
		講義	その他
テキストを指定	46.0	32.0	73.7
プリント配布	73.5	74.7	71.1
板書	72.6	68.0	81.6
OHP・OHC	46.9	50.7	39.5
スライド・ビデオなど	53.1	69.3	21.1
パソコン利用	44.2	34.7	13.3
その他	13.3	13.3	13.2

表2.3 成績評価に利用したもの・授業形態別(複数回答)

カテゴリ	全体	授業形態別	
		講義	その他
レポート提出	45.1	53.3	28.9
ノート提出	2.7	4.0	-
随時の試験	15.0	10.7	23.7
定期試験	61.1	58.7	65.8
出席回数	76.1	74.7	78.9
受講態度	35.4	22.7	60.5
授業内レポート	48.7	58.7	28.9
その他の自主課題	16.8	8.0	34.2

表2.4 学生とのコミュニケーションに利用したもの
・授業形態別(複数回答)

カテゴリ	全体	授業形態別	
		講義	その他
対話	47.8	42.7	57.9
質疑応答	66.4	61.3	76.3
授業内レポート	41.6	48.0	28.9
その他	17.7	14.7	23.7

これらの比較により授業運営に利用されている手段は授業形態によって差があることが分かる。

2.2.3 2群の平均値の差の検定による特徴把握

教員による今期授業運営の実績評価の項目はそれぞれ5段階評価で15項目ある。これらの回答選択肢に便宜的なウェイトを与えて平均値を算出し、それらを前節の再カテゴリ化群間での比較を行うと表3のようになる。

表3 運営実績評価と基本属性との関連

	分割基準		平均値に差のある項目	平均値		p
				群1	群2	
科目群別	1群	2、3群	学生の理解が進んだ	2.000	2.429	0.0137
			興味・関心を高められた	1.912	2.236	0.0475
			学生に感動を与えられた	2.411	2.946	0.0078
			授業内容は役立つ	1.500	1.929	0.0089
授業形態	講義	その他	シラバスに合致した授業	2.171	1.703	0.0260
			授業内容は役立つ	1.892	1.368	0.0023
			授業実施は楽しかった	2.216	1.632	0.0009
			大量の板書が必要だった	3.137	3.684	0.0400
			欠席が多かった	2.890	3.500	0.0165
学年指定	1年	その他	遅刻が多かった	3.120	3.727	0.0275
			学生の質がバラバラ	2.260	3.000	0.0108
登録者数	~39	40~	シラバスに合致した授業	1.647	2.160	0.0179
			授業内容は役立つ	1.382	1.867	0.0008
			授業実施は楽しかった	1.676	2.160	0.0076
			受講態度はまじめ	1.735	2.427	0.0029
			欠席が多かった	4.382	3.514	0.0033
	~69	70~	授業内容は役立つ	1.523	2.000	0.0085
			受講態度はまじめ	1.969	2.568	0.0065
			欠席が多かった	3.369	2.598	0.0078
			私語画多かった	4.109	3.318	0.0047
			予定した内容をこなせた	2.153	1.706	0.0385
自己評価点	~79	それ以上	シラバスに合致した授業	2.241	1.765	0.0197
			学生の理解が進んだ	2.576	1.804	0.0000
			興味や関心を高められた	2.345	1.784	0.0006
			学生に感動を与えられた	2.932	2.400	0.0115
			授業内容は役立つ	2.034	1.340	0.0000
			授業実施は楽しかった	2.373	1.580	0.0000
			受講態度はまじめ	2.593	1.740	0.0001
			欠席が多かった	2.793	3.500	0.0040
			遅刻が多かった	3.241	3.750	0.0194
			私語が多かった	3.368	4.314	0.0005
テキスト買わない者あり	2.977	4.171	0.0003			

* 欠席、遅刻、私語等の項目では他の項目と異なり平均点が低い場合に「評価が高い」関係にあることに注意。

これらの特徴を要約すると、以下のようになる。

- ・科目群別では1群科目についての評価が高い
- ・授業形態では講義以外の形態についての評価が高い
- ・学年指定では1年次生については「遅刻が多い」「学生の質がバラバラ」との評価が多い
- ・登録者数との関連では、小人数のクラスについての評価が高い。特にクラス規模39人以下の場合により評価が多く見られる
- ・自己評価点との関連では少数の項目を除き、自己評価点の高い科目では高い評価を与えている。これを裏返して言うと多くの評価項目により評価を与えた場合に高い自己評価点を与えていると見られる

2.2.4 数値項目の上下端に見られる特徴

設問中、数値項目として扱えるのは登録者数、自己評価点の2つである。まず受講登録者数が極端に多い科目を挙げると表4となる。

表4 受講登録者数が極端に多い科目

科目名	登録者数	群	学年配当	特性	曜日・時限	評価
メディア産業論	450	2	1	選択	月2	7.5
文化人類学	414	1	1	選択	月3	6.0
余暇開発論	251	2	2	選択	月3	N.A
人間関係の心理学	234	2	2	選択	水2	8.0
環境社会学	230	2	1	選択	月4	N.A
科学概論	219	1	2	選択	木1	5.0
コミュニケーション と文化	210	2	1	選択必修	火2	7.0
異文化コミュニケー ション	202	2	1	選択	水1	8.0
民俗学	201	2	1	選択	火1	8.0
マス・ミコミュニケ ーション史	200	2	2	選択	月3	7.5

*登録者数200以上の科目を挙げた。

学生に人気のある主題が選ばれているのだが、同時に登録者数が極端に多い科目は月曜の授業に多いことが分かる。

一方、受講登録者数の少ない科目は表5の通りである。

表5 受講登録者数の少ない科目

科目名	登録者数	群	学年配当	特性	曜日・時限	評価
資格英語B	5	2	1	選択	水2	8.0
経営組織論	6	2	2	選択	木5	9.0
メディア英語B1	7	1	3	選択	金1	9.5
情報セキュリティ	8	1	2	選択	火5	8.0
意思決定論	13	2	3	選択	木4	8.0
資格英語A	17	1	1	選択	木2	8.0
メディア英語	18	2	3	選択	月4	9.5
情報管理論	19	2	3	選択	月3	8.0

*登録者数20以下の科目を挙げた。

次に自己評価点の高い科目と低い科目を表6に示した。

表6 教員による自己評価点の高い科目、低い科目

科目名	登録者数	群	学年配当	特性	曜日・時限	評価
メディア英語 B 1	7	1	2	選択	水 2	9.5
CALL	65	1	1	選択	金 2	9.5
CALL	21	1	1	選択	月 1	9.5
近代思想史	52	1	1	選択	木 3	9.5
メディア英語	18	2	3	選択	月 4	9.5
社会と倫理	132	1	1	選択	木 1	9.5
地域活性化論	114	2	1	選択	木 2	5.0
情報基礎	36	1	1	必修	月 1	5.0
科学概論	219	1	2	選択	木 1	5.0
環境心理学	-	2	3	選択	金 4	5.0

*自己評価9.5点と5.0点の科目を示した。

これらはいずれも担当教員による自己評価点である。

3. 考察

大学における自己点検活動のうち授業評価の分野では個別の授業に対する学生による授業評価が主流であり、千葉県内の多くの大学もそうした活動を行っている。本委員会があえてその主流に従わなかったのは主に2つの理由による。

第一の理由はその種の評価が授業改善に果たして役だっているのかが確認できていないためである。大方の合意による抽象的な数値評価は出すことはできても、それらの効用についての顕著な例が見られないように思われる。

第二の理由はその種の授業評価のためのファシリティが本学にはまったく欠如しているためである。

こうした経過からとりあえず教員自身が自らの授業実施について、どのように評価しているかを問うこととした。初めての試みのため曲折はあったが、ここに一応の報告をお届けすることができた。結果の概要は解釈抜きで2章に概説したので参考にして欲しい。また個別の自由回答結果も学科、授業種別ごとに付帯して載せたので、次年度の授業運営や次期カリキュラム改訂などに役立つ点があると思われる。

今後の方向であるが、本年度後期の授業についてもほぼ同種の教員による評価を求めることで、年度全体についての感触が得られることを期待し、実施することとしたい。ただし、企画や結果のとりまとめなどについては学務データとの照合、データ処理などにかかりの負担が委員会（特に委員長）にかかるため、もう少し本気でサポート体制が組まれる必要がある。

なお、学生による大学生活全般にわたる評価については卒業式当日、本年度卒業生に評価票を配布し記入する方式で実施することを計画しているので、関係の方々のご協力が得られることを期待している。

江戸川大学・江戸川短期大学学報 Vol.2 No.2 (通巻8号)
2003年2月1日発行 (臨時増刊号)

編集 江戸川大学・江戸川短期大学事務局企画課
発行 〒270-0198 千葉県流山市駒木 474
TEL04-7152-0661